

オリンピックと アジア競技大会

工藤 莞司

私にとってオリンピックと言えば1964年の東京オリンピックである。と同時に思い出されるのが、アジア競技大会だ。6年前の1958年、やはり東京で第三回アジア競技大会が開かれて大成功した。この経験が東京オリンピック開催へのステップだったと思う。戦後の荒廃から立ち上がった我が国は、昭和30年代に入ってようやく経済発展の兆しが見え始めた。それを待っていたかのようにアジア競技大会開催の番が回って来たのだ。第一回は1951年ニューデリー、第二回は1954年マニラであり、アジアでも3番目の開催国であったのだ。それまで我が国は復興の最中で、参加はしたものの大会開催どころではなかったのである。

東京大会は、記録映画「限りなき前進（EVER ONWARD）」となって我が田舎町にもやってきた。大会の花形は陸上競技である。大会開催に合わせて現国立競技場や聖火台が設置された。整備されたアンツーカーグラウンドやスタンド、乱れのない白線のトラック、緑の芝生のフィールドと見る物すべてに目を見張らせた。土と小石混じりの学校校庭しか知らない者には夢のグラウンド、華の舞台であった。その中をアジアのアスリート達は堂々と走り抜け、互いに競い合った。参加者の中で我が国女子短距離代表、当時京都光華中学生であった塩尻、元田両選手が記憶に残っている。確かアジアの強豪選手を相手にして優勝はならなかったと思う。

こうして、東京オリンピック開催への布石は打たれた。時は進んで、経済成長は続伸し、オリンピック開催の成功を機に、我が国は先進国へ仲間入りをしていったのである。我が国のこうした軌跡は隣国韓国（ソウル開催アジア競技大会1970年中止、1986年開催、1988年オリンピック開催）も踏襲していると思う。そして、今年北京オリンピック開催（アジア競技大会開催1990年）の中国も、同様とみるのはどうだろうか。

理不尽なボイコット騒ぎ

フロググさん

オリンピックについて書けですって？ うーん、ちょっと困りましたね。メダルの数には興味があっても、スポーツ観戦には興味がないんで。ボクは運動音痴でスポーツは割と苦手です。運動会は雨で中止になれば良いと必死で雨乞いをしたくちでありまして（笑）。そんなボクが、その運動会の親分格に匹敵するオリンピックについて書くことができますか！？

そんなボクでも、1つだけオリンピックのスポーツ選手の気持ちが痛いほど分かることがあります。それはボイコット騒ぎです。

今回の北京オリンピックではチベットの騒擾をきっかけに、一部でボイコット論が巻き起こりました。現実の話として、1980年のモスクワオリンピックでは、日本はアメリカに追随してボイコットしています。スポーツの祭典とはいえ政治とは無縁でいられないのがオリンピックです。

まー、政治家は気分が良いでしょうね…。でも、当の選手の立場は？ 全ての努力がパーですよ！ こんな理不尽なことってあるのでしょうか？

弁理士試験が4年に一度しかない世界を想像してください。その世界で一生懸命に勉強してきた受験生が、政府の都合で「今年は受験中止！」とか言われた日には、もー泣くしかありません。口述不合格よりも酷いです。まー、こーゆー発想も珍しいかもしれませんが（汗）。

そんなわけで運動音痴のボクとしては、北京オリンピックが平穩無事に開催されることを期待してやまないわけです。まー今のこの時代にボイコットの可能性はほとんどないとは思いますが、そーゆー話が出てくるだけでも興ざめですからね。

さてと、いよいよ夏本番、そしてオリンピック開催です。いったい、どんなオリンピックになるのでしょうか？ 北京オリンピックが選手にとってすばらしい祭典でありますように、そして今年の夏が皆様にとって思い出深い夏でありますように。

【オリンピック】 “OLYMPIC”

オリンピックと私

安田 亮輔

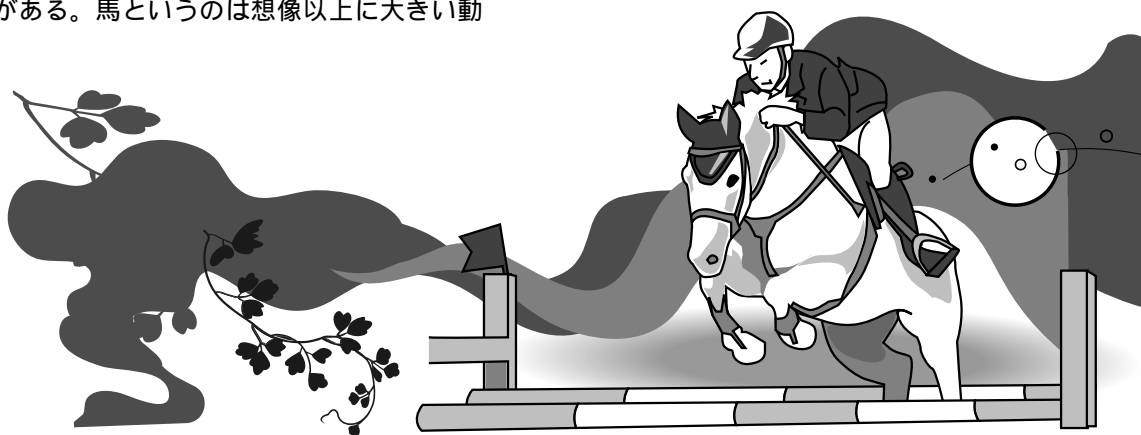
オリンピック。4年に一度のスポーツの祭典である。オリンピックでは、各国が獲るメダルの個数はもちろんのこと、開催都市に関する情報、政治背景との関連など、多様な情報がメディアを通じて行きかう。小さい頃からスポーツを観るのが好きだった私は、やはりスポーツそのものに関心があり、テレビにかじりついて競技を見た記憶がある。小学生だった頃は夏休みということもあり、宿題そっちのけで見ていた。カール・ルイスが4冠を達成したロス五輪（1984年）は、特に印象に残っている。100m走のゴール間際になって、必ずレーンの先頭に現れる彼は、「がんばれば最後には必ず勝てる」ことを示してくれたように思う。

その後の大会では、大学受験に重なっていたり、社会人になってTV観戦の時間が合わなかったりと、あまりオリンピックに熱中した記憶はない。今年は北京五輪である。何かと注目度の高い中国での開催であり、スピード社製の水着等、事前の話題も豊富で、気になる大会だ。実は、今大会で注目している選手が一人いる。馬術に出場予定の法華津（ほけつ）寛選手である。

馬術というのは奥が深い競技のようである。私も、結婚をきっかけに、妻の趣味である乗馬を何度かやったことがある。馬というのは想像以上に大きい動

物であり、背中に跨るとかなり高い。それが、乗り手の指示（「扶助」といって、具体的には足で馬のおなかを押さえたり、手綱を引いたり、鞍の座り方で指示を送る）に従って、走り、曲がり、止まる。これは言うは易しで、相手も動物であるから指示がうまく伝わらず、オートバイのように動いてくれない。私など、下手な乗り手の指示は的確でないから、調教されている馬ほど、どう動いたらよいかかわらず戸惑う。もちろん（乗り手の）体力の消耗も相当である。

さて法華津選手だが、なんと東京オリンピック（1964年）以来の出場であり、67歳の大ベテランである。ロスやソウルでは出場のチャンスに恵まれず、今回の北京は、法華津選手の「自分超え」への挑戦でもある。偶然だが、法華津選手の所属する乗馬クラブは、妻も通ったクラブであり、ますます応援したくなった。その年齢も注目に値するが、50年かけて磨き上げた人馬一体の演技が楽しみである。今年の創英は「自己実現」をテーマとしている。法華津選手の姿を見て、カール・ルイス以来の刺激を受けるオリンピックになるだろうか。馬術は、8月9日から香港の会場で開かれる。



フィギュアスケートと音楽

柴田 美幸

オリンピックといえばスポーツの祭典、日本国民が君が代を聞きたくなくなる数少ない期間です。しかし、残念ながら、私自身はスポーツにさほど興味はなく、オリンピックはTVでやっていれば見る程度でしかありません。そんな私でも一つだけオリンピックで印象に残ったことがありました。フィギュアスケートです。荒川静香さんが金メダルを取った時だけは、オリンピックの曖昧な記憶の中でも強く残っています。

フィギュアスケートはシンクロなどと共に美しさも競われる数少ないスポーツであり、スポーツとしての技術に加え、音楽・衣装なども重要視されます。スポーツの知識がなくても観ていて楽しめるので、私もオリンピックに限らず世界選手権などよく観ていました。荒川選手が金メダルを取った時の曲はブッチーニの「トゥーランドット」より「誰も寝てはならぬ」です。詳しいエピソードは調べて頂きたいのですが、一言で言いますとこの曲はトゥーランドット姫との結婚を目前にした王子の、自信に溢れた気持ちを表現した歌です。曲調も華やかというよりは非常に荘厳な感じで、荒川選手の演技の完璧さから滲み出す自信や誇りを感じずにはいられませんでした。

やはり、フィギュアスケートにとっては、演技ももちろん重要ですが、選曲も大きな要素となるのではないかと感じます。実際フィギュアスケートで使用される曲は、まず有名で華やかな曲や、歌劇や物語仕立てになっている曲が多いです。浅田真央選手はチャイコフスキー作曲のバレエ「くるみ割り人形」より「花のワルツ」や「こんぺい糖の踊り」（ソフトバンクのCMで使われていますね）、高橋大輔選

手は同じくチャイコフスキー作曲の「幻想序曲ロミオとジュリエット」などを使用しています。チャイコフスキー以外ですと、ビゼーの「カルメン」やラフマニノフの「ピアノ協奏曲」などもよく使われています。少ない時間で印象に残る演技をするには、やはり聞きやすい、ドラマチックな曲になるのではないのでしょうか。荒川選手が金メダルを取った後は街中でもよく「誰も寝てはならぬ」が流れたので、少しでもクラシックの良さが広まったなら、音楽に携わる者としてはうれしい限りです。

さて、オリンピックにまつわる音楽といえば、ロス五輪で使われたジョン・ウィリアムス作曲のオリンピックファンファーレも有名ですね。トランペットの華やかなファンファーレと低音が迫力の曲です。みなさんも一度は耳にされたことがあると思います。私事ではございますが、私の所属するプラス・カスミッシモの第10回定期演奏会でも演奏しますので、是非オリンピックの興奮冷めやらぬ9月14日、鎌倉芸術館まで足をお運び下さい。



【オリンピック】 “OLYMPIC”

ドリームチーム

石井 孝和

いよいよ8月8日から北京オリンピックが始まります。何でこんな真夏に？と疑問を抱きましたが、どうやら中国では『8』という数字は縁起が良いとか…。ちなみに開会式は20時(8時)8分から始まるそうです。今回のオリンピックは大きな時差もないため、リアルタイムで楽しめるのではないのでしょうか。

さて、前回ギリシャでの日本選手団ですが、金16銀9銅12と日本のスポーツ史に残るメダルラッシュでした。あれから4年。時が経つのは早いものです。オリンピックを目指す選手たちは、この4年という月日をどのように感じているのでしょうか。とにかく、世界一になるためだけに費やした4年間のすべてが、たった一度の試合で決まるわけですから、想像を絶するプレッシャーを抱えているに違いありません。特に陸上競技の短距離などは数秒で勝負が決まってしまう。しかもコンマ何秒を競う競技。おそらくは身体能力以上に精神力の強さが勝負の決め手になるのでしょうか。スタート直前のあの緊張感は、スポーツの域を超えるほどです。

話は変わりますが、これまでのオリンピックの中で、特に印象に残っている思い出をお話したいと思います。今から16年前の1992年に行われたバルセロナオリンピックです。男子柔道で現在は格闘家として活躍している吉田秀彦選手、そして古賀稔彦選手のW金、また水泳では当時中学生の岩崎恭子選手(同い年!?)が200m平泳ぎで金メダルを取ったのもこの大会です。まだ記憶に新しいことでしょうか。さてこの大会で、『ものすごい』チームが出場していたのはご存知でしょうか。男子バスケットボールのアメリカチームです。

そもそもバルセロナ以前のアメリカはNBAという世界最高峰のリーグを持ちながら、オリンピックのような大舞台で思うような結果を残すことがありませんでした。それもそのはず、当時オリンピックにはプロ選手の出場を制限する規定があったのです。しかし1989年にオリンピック組織委員会が、各競技にプロ選手の参加資格を認めたことから、16年たっ

た今でも伝説として語られている【ドリームチーム】が結成されたのです。

とにかくメンバーが『ものすごい』!!バスケット界で絶大な人気を誇っていたマジック・ジョンソンが中心となり、バスケットの神様と評されたマイケル・ジョーダン、さらにはチャールズ・バークレー、ラリー・バード、パトリック・ユーイング、カール・マローン、スコッティ・ピッペンといったようなトップクラスの超大物選手ばかり。

NBAにも野球のようにオールスター戦がありましたが、やはり東西2チームに分かれてしまうため、ここまで人気のある選手がひとつのチームに集まるのは、まさに【夢の共演】です。もちろん決勝を含む全試合でなんと平均40点以上の差(ものすごい)をつけ軽々と金メダルを獲得したのです。それだけではなく、試合前に対戦チームの選手が、記念撮影やサインを求めているというエピソードも。普通では考えられない光景です。どんな競技でも多少の実力の差はあるにしろ、『どちらが勝つのだろう』といったハラハラドキドキする気持ちがスポーツ観戦の醍醐味ではありますが、この時ばかりは「アメリカが勝つだろう」とわかっているにもかかわらず、それ以上の驚きと興奮を与えてくれました。

それからというもの、このバルセロナオリンピック【ドリームチーム】のおかげで、私はすっかりNBAのとりこになってしまいました。選手が試合中に履いていたシューズと同じモデルが日本でも発売されましたが、お小遣いを握り締め何時間を並んで購入し、ジョーダングッズで全身を固め、部屋の壁には選手のポスター。まさにアイドルの追っかけ状態(笑)甘酸っぱい青春時代です。

最近でもサッカーワールドカップ開催中など、渋谷の街が青いユニフォームを着た若者であふれ返る中、ひとりレイカーズ(NBAの大好きなチーム)のまっ黄色のTシャツを着てみたりと、ささやかな楽しみ方をしていることは秘密にしておきます。

ある新体操選手の思い出

モモ

スピードやゴール数を競うスポーツには残念ながら余り興味がありませんが、美しさを競う舞踊系の競技は好きで、フィギュアスケート、体操、新体操、シンクロナイズド・スイミングなどはつい見えてしまいます。特にいつも見入ってしまうのは新体操です。演技・振り付けもさる事ながら、衣装、ボールやリボンの色（リボンは選手自身による手染めなのだそうです）、選曲など、トータルで楽しむ事ができます。

また新体操で見逃せないのが、選手達の驚異的な柔軟性です。足が垂直に上がるのは当然の事で、のけ反った頭が背中にくっつき、長い手足は不思議な形で体に絡まり、リボンなのか足なのか見分けがつかず、その凄さは筆舌に尽くし難いものがあります。中でもひととき柔軟性に優れた選手になると、他の選手達が絶対に真似できないような軟体ポーズで演技を締めくくって差を見せ付け、観客を魅了します。

さて、そんな新体操選手の中で今でも鮮明に覚えているのが、2000年のシドニーオリンピックに日本人として唯一個人戦に出場した、松永選手です。彼女、実は中学・高校が私と同じで、個人的な付き合いはなかったものの、ずっと活躍を見聞きしてきた選手でした。中1の頃から様々な試合に出場していて、学年が上がると共に試合の成績も上がって行き、高3の頃には全日本選手権を連覇するトップ選手になっていました。オリンピック選考会で松永選手が勝ち、彼女のオリンピック出場が決まった時は、他の同級生達と皆で喜んだのを覚えています。

彼女は毎日何時間にも及ぶ厳しい練習をしていながら、ご飯はレタス、トマトと少しのおかず、という話を聞いた事があります。私も当時、部活動で毎日体を動かしていましたが、食べ盛りのお年頃、部活の後は部活仲間とコンビニへ通う毎日でした。そんな同年代の旺盛な食欲を尻目に、厳しい食事制限の中でトレーニングを継続するには、きっと相当な精神力を要した事でしょう。その甲斐あって、また天性の美しさにも恵まれて、彼女は、長身、10頭身、長く細い手足という、従来の日本人選手には見られなかった抜群のスタイルを保ち続けていました。その美しさはテレビの中でも変わる事はなく、オリンピックに出場した新体操選手の中でも、決して引け劣る事はありませんでした。

シドニーでは16位という結果でしたが、日々の並々ならぬ努力の成果を存分に発揮し、オリンピックという大舞台で堂々と演技していた彼女の勇士を、私は今後もずっと忘れないと思います。

